

序論)

みなさん、おはようございます。今日はイースターという特別な日の礼拝をみなさんと共にできることを心から感謝いたします。

イースターというのは、先ほどの「こどもメッセージ」でお話したり、「イースター交読文」で共に読んだりしたように【主】イエスキリストが十字架に掛かり、三日目に蘇られたことをお祝いする日のことです。

キリストの十字架と復活の概要)

私達の父なる神様は、私達のすべての罪をイエス様に背負わせて、私達が裁かれる代わりにイエス様を十字架によって裁き、イエス様が十字架の上で死ぬことによって、罪人としての私達がイエス様と一緒に死ぬようにしてくださいました。

それはイエス様が生まれるずっと前から決められていたことで、イエス様の十字架における苦しみは、イエス様が生まれるずっと前に書かれた預言書に記されていることでした。その代表的なものが旧約聖書のイザヤ書 53 章の預言です。先程のイースター交読文の中にも一部ありましたが、改めて読みたいと思います。ちょっと長いので私が読みます。スクリーンにその預言を表示しますのでみなさん、それを目でおってください。

イザヤ書 53 章

53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、【主】は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。

53:7 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

53:8 虐げとさばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことか。彼が私の民の背きのゆえに打たれ、生ける者の地から絶たれたのだと。

53:9 彼の墓は、悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた。彼は不法を働かず、その口に欺きはなかったが。

53:10 しかし、彼を砕いて病を負わせることは【主】のみこころであった。彼が自分のいのちを代償のささげ物とするなら、末長く子孫を見ることができ、【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。

53:11 「彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。

53:12 それゆえ、わたしは多くの人を彼に分け与え、彼は強者たちを戦勝品として分ち取る。彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである。彼は多くの人を罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」

(7節を表示) 人々が、イエス様を十字架にかけるための裁判をするとき、イエス様は自己弁護をするようなことは一切言わずだまって人々の罵倒を受け入れられ、十字架につけられることをよしとされました。

そして、イエス様は両手と足に釘を打たれ十字架に付けられて、その十字架の上から人々の罵倒と侮辱の声をかけられながら、(12節を表示)「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」と祈って、自分を殺す人たちが赦されるためのとりなしの祈りをされました。

(9節を表示) そして、アリマタヤのヨセフという今でいうところの国会議員のような富んでいた力のある人が用意したお墓に葬られました。

これらは全部神様が計画されていたことで、イエス様が生まれて死ぬずっとまえに聖書の中の預言書にかかれていたことでした。そして、その死によって私達の身代わりになってくださったのです。

さて問題は、イエス様は十字架の上で死んで終わりではなかったということです。今も昔も、多くの人々が信じることはできない。よみがえりをイエス様は十字架で死んでから三日目になされたのです。

私達クリスチャンはこのイエス様の蘇りがあったからこそ、現代に至るまでイエス様のことを救い主と信じ続け、そして、教会を各地に作ってきました。

私達クリスチャンにとって、イエス・キリストの蘇り、イースターの出来事はクリスマスより大切なことであり、イエス様が蘇ってくださったからこそ、今の私達があるということが出来ます。

なぜでしょうか。

キリストの蘇りが在るからこそ、キリストが約束された「死んでも生きるいのち」(ヨハネ 11:25-26) が本当にあることをしり、

キリストの蘇りがあるからこそ、私達も蘇らされる (I コリント 15 : 20-23) 事を確信することができ、

キリストの蘇りがあるからこそ、十字架で死なれたイエスキリストが本当に神の子であることを知ることができ (ローマ 1:4)、

キリストの蘇りがあるからこそ、信じる者の中に働いている神様のちからが死人をも蘇らせることができる圧倒的な力であることを知ることができるからです。

だから、どんなに世の中の人々が信じることができなくても、イエス・キリストの復活という事実は、なくてはならないものであり、私達はクリスマス以上にこのイースターを大切にしています。

パウロの紹介)

さて、このようにイエスキリストの十字架と復活の概要をお話したところで、今日は一人の人をみなさんに紹介したいと思います。

その人はパウロという人です。彼は、もともとはアンチ・キリスト教の人で、クリスチャンたちを捕まえて殺すことに情熱を燃やしているような人物でした。

ところが彼は、復活したキリストに出会ったことによって、その人生が180度かわって誰よりも多くの地域にイエスキリストを伝えるようになった人です。

ある意味で、キリスト教が世界宗教になったのはこの人がいたからこそであり、この聖書には彼が書いた手紙が、神様のことばとして多くのっています。どれぐらい多いかというと、27個の書簡が掲載されていますが、その中の13個はパウロが書いたものです。新約聖書の中の約半分が、パウロが書いたものということです。ですから、人によっては「キリスト教はパウロ教だ。」なんていう人もいるぐらいですけれども。パウロがそれほどの活躍ができたのは、蘇ったキリストがおられたからこそなのです。

当時、聖書の舞台であるイスラエル近辺において世界とはローマ帝国そのものでした。パウロはそのローマ帝国をまたにかけて旅行をし、あらゆる地でイエス・キリストが神の子であり、救い主であることを宣べ伝えていました。

彼がキリストを伝えるために移動したのは**最初の旅行 第一次伝道旅行で1600km、2回目の旅行（第二次伝道旅行）で5000km、そして3回目の旅行（第三次伝道旅行）で8000km 合計すると約15000km**を、キリストを伝えるために移動し続けたのです。15000km っていうのはここから地球の裏側のチリとか、ブラジルぐらいまでの距離です。飛行機も電車も車もない時代、この距離を移動しながらキリストを伝え続けたということがどれほどすごいことなのか。こうして数字にしてみるとわかりやすいと思います。

さらに言えば、彼のキリストを伝える旅行は簡単で楽しい旅ではありませんでした

た。パウロは先程読んだ聖書の 10 節で

4:10 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。

とっています。これはイエス・キリストを伝える旅が、イエス・キリストの十字架の苦しみを追体験するほどの苦しいものだったことを指しています。

実際、聖書の使徒の働きというところを見ると、彼のこの伝道旅行が苦難にみちたものであることがわかります。箇条書きにするとこんな感じです。

- ・ダマスコで石打ちの刑に処されるどころだった(使徒 9:23-25)
- ・エルサレムで殺されるどころだった(使徒 9:29-30)
- ・アンテオケでユダヤ人に危害を加えられた(使徒 13:50)
- ・イコニオムで石打ちの刑に処されるどころだった(使徒 14:5-6)
- ・ルステラで実際に石打ちにあい、死んだとみなされた(使徒 14:19-20)
- ・ピリピで投獄され、ムチで打たれた(使徒 16:22-24)
- ・テサロニケでいやがらせを受けた(使徒 17:5-9)
- ・ベレヤでもいやがらせを受けた(使徒 17:13-14)
- ・コリントでユダヤ人に不当な告発を受けた(使徒 18:12-17)
- ・エペソで暴動に巻き込まれそうになった(使徒 19:23-41)
- ・エルサレムで逮捕された(使徒 21:27-36)
- ・船旅の途中で船が座礁した(使徒 27:13-44)
- ・毒蛇に噛まれた (使徒 28:3-6)
- ・2年間カイザリヤで投獄された(使徒 24:27)

この他にも彼が書いた手紙には、川の危険、強盗の危険、町での危険、荒野における危険、海の上の危険、労苦、苦しみ、徹夜、飢え乾き、寒さと裸による苦しみなど、様々な困難を経験したと書いています (Ⅱコリント 11 : 26-27)。

みなさん、こんな旅をしたいと思いませんか？ 地球の裏側にまで歩いていくような距離を、これほどの苦難に会いながら、ひたすらキリストを伝えるために歩み続ける。そんなことができる人が現代にいるのでしょうか。

彼が経験した困難さを考えると、それは「イエス様の十字架の死を経験した」って彼がいたくなる気持ちはよくわかります。

パウロはなぜ、こんな苦しみを経験しながらも、イエス・キリストを宣べ伝えつづけたのでしょうか。パウロがトライアスロン選手も真っ青なぐらいな鉄人だったからでしょうか。いいえ、先ほどの聖書箇所Ⅱコリント4章7節をみればわかりますが、彼は自分のことを「土の器」と言っていて自分が脆い存在であることを告白しています。しかも、どうやら彼は目の病にかかっていたみたいです。さらには、彼はもともとエリートの学者ですから、肉体労働者のように肉体が強かったわけではないでしょう。ちょっと叩けば壊れてしまうような、そんな弱さをもちながら、それでも彼は誰にも真似をできないような電動旅行をし続けたのです。

なぜでしょうか。それは十字架にかかって死なれたイエスキリストを三日目に蘇らせた力が、パウロの中に働いていたからです。だから、彼は立ち止まらなかったのです。パウロのことばを改めて読んでみましょう。7節から10節

4:7 私たちは、この宝を土の器の中に入れて 있습니다。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではないことが明らかになるためです。

4:8 私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。

4:9 迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。

4:10 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。

パウロだけじゃない。教会の歴史を振り返っても、その歴史は迫害と困難の歴史でした。そのそも、最初の教会時代、ユダヤ人からの攻撃に加え、ローマ帝国の皇帝からもキリスト教徒は迫害されていました。彼らは、キリスト教徒を捕まえては拷問したり、野獣と戦わせたり、生きたまま火で燃やしたりしたのです。だから、キリスト教徒はカタコンベといわれる地下墓地に逃げ込んで、そこで礼拝しなければいけませんでした。

また、キリスト教がローマの国教になったあとも、聖書の正しい信仰に立ち返ろうとした人たちは、ローマ・カトリックから迫害されいのちを危険にさらされました。

そして、現在もそうですがイスラム勢力が強くなると、キリスト教はまたも差別や迫害の対象になり、重い税をかされたり、殉教者がでたりしました。現在でも、あのイスラム圏に於いてキリスト教徒が殺されるということがあるのです。

20世紀になって「神なんていないんだ。人は人の力で楽園を築けるんだ。」という思想である共産主義の政権の下では、キリスト教はまた迫害され、ソ連、中国など

の教会は閉鎖され、投獄され、殉教者をだしていきました。

それでも、キリスト教徒は礼拝を続け、キリストを伝えることを続け、キリストの愛を実践することを続けていきました。

なぜでしょうか。それはパウロが、「私は」ではなく、「私達は」と表現していることから分かる通り、キリストを蘇らせた神の力は、今もなお、私達の中に働き続けてくださっているからです。

みなさん、復活のキリストの力がその人の中にあれば、例えその人が「土の器」のように弱く、欠けやすい、壊れやすい存在であったとしても、その内側にある神様のちからによって、四方八方から苦しめられても窮することなく、途方にくれても行き詰まることなく、迫害されても見捨てられず、倒されても滅びずに、前に進み続けることができるのです。

パウロは、この恵みが、自分だけでなくこのメッセージを受け取っている人たちにも続くことを知っていました。だから、彼はこのように言っています。14節～16節を読んでみましょう。

4:14 主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださることを知っているからです。

4:15 すべてのことは、あなたがたのためであり、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現れるようになるためなのです。

4:16 ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

みなさん、キリストによって救われて、イエス・キリストを蘇らせた神の力を受け取ると、私達は堂々と神様の前に立つことができ、内側から神様の恵みと感謝が満ち溢れてきて、神様の栄光が周りの人にまでとどくようになるのです。

そして、その復活のキリストの力を受けたものは、決して落胆しないですむようになる。なぜならば、キリストを蘇らせた神様の力は、私達の外側の人が衰えることがあっても、私達の内側にある人を日々新しく生まれ変わらせてくださるからです。

私自身、元苛められっ子で自己肯定感が弱い人です。そして、牧師になった今でも、自分が牧師でいて大丈夫だろうか。教会の人々のためにはもっとほかの説得力のあるメッセージをしてくださる牧師先生とか、行動力のある牧師先生が来たほう

がいいのではないか。と思わされることがよくあります。

でも、毎朝聖書を通して、賛美を通して、祈りを通して、キリストを蘇らせた【主】なる神様と向き合う時、土の器の中にキリストという宝をいれて、私を新しくしてくださる神様の力を感じて、前に進むことができるのです。

みなさん、みなさんのために十字架にかかり、三日目に蘇ってくださったキリストは、この神様の恵みを皆さんに与えてくださるお方なのです。

だから、私も牧師になって何回も葬儀をさせていただきましたが、クリスチャンの葬儀は希望を見上げて終わるのです。キリストによって死んでも無くならない永遠のいのちを与えられた者は、この世がどんなに苦しくても、悲しくても、悩むこと、途方にくれることがあったとしても、それでも前に進むことができるのです。

なぜならば、死んでも無くならないいのち、私達の内側で、日々私達を新しくして生かしてくれる永遠のいのちだからです。このいのちを受け取った者にとって、この世の苦しみは一時的なものであり、キリストの復活によって与えられる永遠の世界で受け取る栄光に比べたら取るに足らないものだからです。

最後にもう一度、聖書の言葉を読んで終わりたいと思います。17節と18節を読みます。

4:17 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです。

4:18 私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。

イースターの日、イエスキリストを蘇らせた神様は、この世の苦難では挫折することのないいのちを与えてくださり、さらには永遠の世界において、永遠に続く栄光を与えてくださるお方です。

イースターはその恵みが示された日なのです。だから、私達はこの日を感謝して特別な礼拝を捧げています。

みなさんも、この恵みによって落胆せず、日々新たにされる人生を歩んでいきましょう。

4:16 ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。